

小林隆児著

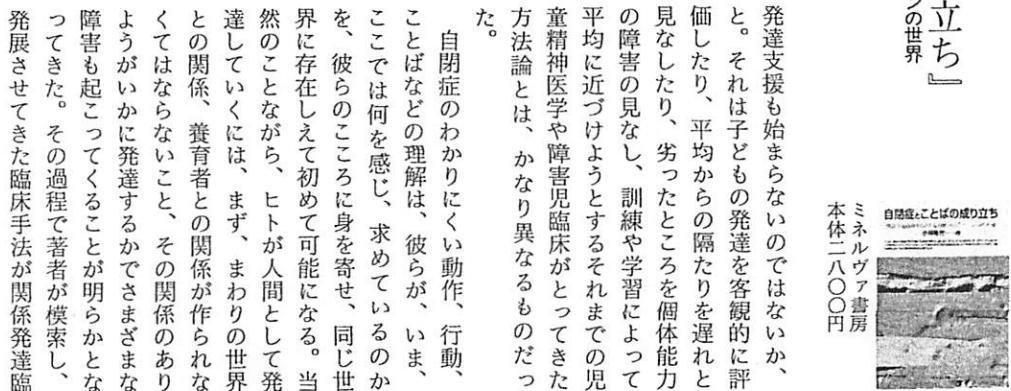
『自閉症とことばの成り立ち』

関係発達臨床からみた原初的コミュニケーションの世界

評者・村田豊久

自閉症への臨床的かかわりを絶え間なく続け、関係発達臨床という独自の領域を築きあげた著者が、本書ではことばの成り立ちという、自閉症の成因を考える上でもっとも重要な問題に正面から取り組んで得られた成果を報告した。著者自身かなりの自信をもつてまとめたもので、著者の臨床家としての迫力を如実にあらわした快心の書といえよう。

著者は三十年前、自閉症の療育に携わるようになったときから、自閉症の子どもの理解しにくいことばや行動を、それはその子どもにとってどんな意味があるのかをわかってやりたいという強い衝動に駆られてきた人であつた。どうしていつも同じことばかり繰り返して言うのか、どうしていつも手をひらひらさせて手指の間から周りを見つめるのか、それはその子がそうしなくてはならない事情があるはずだ、その意味をわかつてやらないと治療も



発達支援も始まらないのではないか、と。それは子どもの発達を客観的に評価したり、平均からの隔たりを遅れと見なしたり、劣ったところを個体能力の障害の見なし、訓練や学習によつて平均に近づけようとするそれまでの児童精神医学や障害児臨床がとつてきた方法論とは、かなり異なるものだった。

自閉症のわかりにくい動作、行動、ことばなどの理解は、彼らが、いま、ここでは何を感じ、求めているのか

を、彼らのところに身を寄せ、同じ世界に存在して初めて可能になる。当然のことながら、ヒトが人間として発達していくには、まず、まわりの世界との関係、養育者との関係が作られる。早期の関係性の未解決さに関連して、大きくなつた子どもでもそこに焦点を当てた働きかけがやはり必要なのか、また有効なのかという疑問もわく。著者はそのことをくわしくは説明しない。当然と考えてのことである。というのは、本書では青年期の自閉症、成人の自閉症が数多く叙述され、ことばをもたない人々、重い行動障害、強迫症状や途絶などの症状を呈している方々への関係発達臨床の様子が報告されている。そして、著者や援助者（臨床指導員）の根気強い接近に、受容されたという気持ちをもつと、どの人も見違えるようにかわり、またことばの発達を見るのであつた。著者はどのように重度の自閉症でも、またことばの発達を見るのであつた。関係性をもてるよう援助するのが、またな関係性をもてるよう援助するのが、一緒に乗り越え、さらに新たな関係性をもてるよう援助するのが、関係発達臨床の要諦である。

本書ではことばが成り立っていないところでは何を感じ、求めているのかとそれはやはり本當だろうと思つた。本書はいろいろのことを教えてくれる人と確信しているようだ。本書を読むとそれはやはり本當だろうと思つた。本書はいろいろのことを教えてくれた。自閉症の臨床のことはもちろん、ことばの誕生と発達についてのこと。一般の育児においてもつとも重要なことは何かということ。そして関係発達臨床は、すべての疾患（統合失調症も含めて）や障害の理解と治療にも役立つようになるのではないかと思つた。

（むらた・とよひさ／西南学院大学教授）